

11. チャプレン

沼野 尚美

(宝塚市立病院 緩和ケア病棟, チャプレン・カウンセラー)

はじめに

チャプレンとは、施設で働く宗教家であり宗教的援助者である。チャプレンは、キリスト教主義の施設には昔から必要とされ、存在してきた。キリスト教主義の施設にチャプレンが、仏教主義の施設にビハラー僧が常時存在するのは歴史上当然のことである。

日本にホスピス・緩和ケア病棟が開設され、全国で200カ所以上の数となり、チャプレンは人数として大きな変化をもたらしてきたわけではないが、宗教カラーをもたない病院にも数は少ないながら、存在する姿がみられるようになってきている。この現実をどう受け止め、チャプレンは前進したらよいのか、ホスピス緩和ケアにおけるチャプレンの役割と動向と今後の課題について、述べたいと思う。

チャプレンの役割

① 苦情や悩みの相談

宗教家には、誠実さや公平さへの期待や、秘密を守ってくれるというイメージをもつ人が多い。それゆえに、医療者への不満や、今まで一度も話したことのない心の内なる話、人生の大切な出来事の話、今困っていることや気がかりなことの話をお聴きすることがある。多忙な医療者よりもチャプレンはやや暇そうなのとも思われている。身体の治療やケアに直接関係がない人なので、遠慮しなくてもいい、気を遣わなくてもいい人と思われている傾向があって、正直に話をする勇氣やひきとめて話をしようという気持ちをもちやすいようだ。

また、患者が他のスタッフに悩みを打ち明け、その悩みによっては、より専門的な力添えを願って、そのスタッフから応援を求められることがある。

② スピリチュアルケアの提供

スピリチュアルケアには、宗教色を必要としないレベルのものと、宗教色を必要とするレベルのものがある。チャプレンは、前者は他のスタッフと共有してケアにあたり、後者はチャプレン独自の働きを提供することになる。

たとえば、「なぜ、がんになったのか」と問われている人に対して、がんになってしまった悔しさ、情けなさ、腹立たしさを共感するだけでケアになることもあれば、「なぜ、人生に苦しみがあるのか、がんになって神は私に何を教えようとしてされているのか」を求めている人には、宗教が語るメッセージが必要である。また、寂しさには人恋しい寂しさと、1人で旅立っていく孤独感がある。誰かがそばにいてくれることでなごむこともあれば、「生と死にまたがって神はあなたと共にいる」というメッセージを必要としていることもある。

人生の後悔や怒りをもっている人がその思いを分かち合ってくださいるとき、一生懸命に聴こうとするこちらの共感的態度がケアになることがある場合と、神の赦しと神がくださる心の平安までを求めている患者もいる。余命の過ごし方に関して、自分は何をしたいのかを考える患者は多く、有意義に過ごせるように援助してきたが、「残された時間に神は私に何をしてほしいと願っておられるのかを祈って求めている」と言われたクリスチャンの患者には、その信仰を支えるアプローチを必要とした。

死後の世界を求める叫びにおいては、あの世がこんな所だったらいいのという慰めのイメージを求めて話し合うだけでも援助になることもあれば、自分の勝手な思い込みではなく、聖書に根拠のある死後の世界に希望を求める人もいる。愛されたいという欲求も、人間的な思いやりだけで幸せを感じられ満足する人もいれば、神に赦され愛されているという確信によって、やっと十分に心が満たされたと感じる人がいる。

③ スタッフの心のケア

医療スタッフは、いろんな悩みを抱えている。病気のための言動と分かっているのに、患者に怒鳴られると心はへこむし、傷つく。また、精一杯力を尽くした医療でありケアであったとしても、後悔するものや納得できないものを心に残していることがある。また、スタッフ間の人間関係からくるストレスをもつこともある。そんなとき、チャプレンはチームメンバーだからこそ、そばで彼らの働きを見ているからこそ、その悔しい気持ちや腹立たしい気持ちを理解することができる。

職種や立場の違いがあるから、互いに素直な思いで関わるができる。スタッフケアのときに大切なことは、カウンセリングをするかのような対応ではなく、チームメンバーとして仲間として関わることである。そして、多くの場合、聴くだけでよい。求められれば意見を言うこともあるが、一緒に悩み、考え、親身になって一緒に頑張ろうと伝えることである。

④ スタッフの相談相手

医療者も患者や家族のスピリチュアルペインに関わりケアを提供する必要がある。スピリチュアルペインをキャッチしたスタッフがどう関わりケアをするかにおいて、コミュニケーションのとり方やアプローチの仕方について悩んでいる。スタッフの相談にのり、チャプレンは可能な対応方法を伝えることができる。

また、スタッフが患者や家族、あるいは他のスタッフとの信頼関係づくりに悩むとき、チャプレンは相談相手になることができる。

⑤ 信仰の成長のための援助

患者や家族、そしてスタッフの中には、自ら信心する宗教をもち、信仰を大切にしている人がいる。チャプレンは、彼らの信仰上の悩みに関わり、信仰を励ましたり、深めたりする援助を提供する役目がある。また、信仰に目覚めた人が信仰を確立していけるように、相手の願いとペースに沿って導く必要がある。

チャプレンは、自分が信心している宗教・宗派以外の信仰に対しても尊重し、相手が求めるなら、自らと違う宗教の宗教家の協力と支援を求めることができる。

チャプレンの働きの動向

① 高齢者の増加と関わり

近年、ホスピス・緩和ケア病棟を利用される患者さんの特徴が変化してきている。

まず、超高齢社会に入り、高齢者が入院患者の大半を占めるということである。しかも90歳代の患者が増えてきている。高齢者の患者の中には、最後まできちんとした会話ができ、よい人間関係を築ける人もいるが、認知症が進んだり、せん妄が生じたりして、会話が成立しにくくなったり、難聴や入れ歯が合わなくなるとの発音障害のために、会話に困難が生じてくるケースが多い。また、高齢者の話は長く、くどい、同じ話を何度もされるともいわれてきた。

チームの中で、チャプレンは何をすべきであり、することができるのかを考える必要がある。増えている高齢者との関わりにおいて、その人にも若いときがあり、人生があったこと、老いても自尊心があることを心にとめ、忙しい医療者たちの関わりを補っていくことが必要である。比較的時間の都合がつくチャプレンは、要領よくしゃべれなかったり、聞き取りにくい高齢者の本音に耳を傾け、医療者とその患者を正しく理解し、対応するために、キャッチした患者の思いと背景を、分かち合うこと、報告することが期待されている。認知症・せん妄状態という言葉で片づけられてしまい、高齢者の人格や本心への関心が薄れてしまわぬように、医療者に働きかける役目がある。

② チームの力を借りた働き方

ホスピス・緩和ケア病棟をご利用される時期が遅くなってきているため、入院時から死亡時までの時間が短くなってきている。化学療法をとことん受けてから来られる方や、がんが発見された時点で末期状態になっている方で、残された日々がかなり少なくなっているケースが増えている。つまり、ゆっくりと時間をかけて関わっている時間がなく、会話ができる時間や症状コントロールのゆえに、穏やかな良い時間をもっといただくのが短い時間になってきているということである。

近年、このような状況のゆえに、1人ひとりのスタッフが信頼関係づくりから始めて、患者の思いを聴き、ケアを提供するといったやり方では、間に合わない。チーム力の質が問われるようになり、チームとして短い期間しか関われない患者のニーズを早くキャッチし、そのときできうる最善のケアを提供するためには、他の職種への理解を深めること、役割を正しく認識して、タイムリーな出番を互いに配慮する必要がある。

筆者は今までチームワークを組む力量のあるドクターやナースにタイミングよく仕事をふってもらい、チームがすでに得ている患者情報を分かち合ってもらって、チャプレンとして焦点を合わせた関わりができたケースがいくつもある。患者に一度しか会えなくてもできるケアがある。一発勝負で、的を射たアプローチをしようと思ったら、ナースをはじめとする他のチームメンバーの気の利いた御膳立てがあると可能であることを学んできた。

チャプレンはチャプレンでしかできない働きをするタイミングを失ってしまわぬように、チームメンバーの力を借りることが大切である。必要な情報がタイムリーに耳に入るように、ここぞというときに関わるチャンスをいただけるように、今まで以上にチームメンバーへの働きかけが必要になってきている。

今後の課題

① チャプレンの存在の増加

チャプレンの存在は、画期的な進化を遂げてい

るわけではないが、チームの中にもいいねと言われるようになってきた。宗教カラーのない病院に、チャプレンが非常勤として勤務したり、ボランティアとして存在していることもある。必ずしも簡単に正職員になれる道はまだついていないが、小さなご縁がチャプレンの存在を生み出している。

筆者はキリスト教主義の病院で正職員として、公立系の病院で非常勤として勤務してきた。両方の形で働いてみて、気づけたことがある。正職員だからこそできることはあるが、医療チームの中で、非常勤でもできることはあるということだ。毎日、患者と会えると、また明日も会えると思いがやすいが、1週間に1回の訪室ならば、患者もチャプレンも互いに1週間後、会えるだろうかという緊張感がある。「明日までは生きられても1週間後には会えない気がする」と、たまにしか会えないチャプレンだけに、別れの挨拶をしてくださった患者もいた。チャプレンはお会いできる回数よりも、“意味ある摂理の時”を生かして働くことを知っているはずだ。医療チームの中に入れる可能性を得るとき、どんな条件でも、そのチャンスをまずつかもう。

② チームワーク力を養う訓練

チャプレンは将来、ボランティアとしてではなく、有給職員として必要とされる立場を獲得できるようにしてほしいと願っている。

時々、チャプレンがほしいが、適当な人材を見つけないと声を出せないという声を聞くことがある。たった1人のチャプレンを求めるとき、職場としてはチャプレンとしての力量の前に、その人柄・人格を重視する。まだ専門資格制度がないだけに、専門能力というよりも、チームワークを組む能力が問われるということである。医療者とチームワークが組めるチャプレンの養成・訓練が必要である。

③ チャプレン同士の協力

日本においてチャプレンは、1つの施設において1名から多くても数名しか存在しない。他の医療スタッフのように、同業者をたくさんもってい

ないので、組織の中で孤独な思いをしてきた。しかも、宗教・宗派の違い、そして個々の考え方の違いを気にするチャプレンたちは、人の悩みの相談者になることができても、自分の弱さや過ちも含めた本心を他のチャプレンに分かち合うことに不慣れである。

チャプレンが心が合う医師や看護師から励ましを得ることができるとするならば、これは素晴らしいことである。と共に、チャプレンには

I. ホスピス緩和ケアを支える専門家・サポーター

チャプレンしか分からない気持ち・思いがある。チャプレン同士が出会い、互いに助け合える関係になるためには、自己の殻を破った成長が必要である。

文 献

- 1) 沼野尚美：チーム医療におけるチャプレンの役割と心得. THE LUNG 20 (2) : 94-96, 2012